



## 近世造営組織と建築技術書の変遷に関する研究

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 永井 康雄   |
| 号   | 1780  |
| 発行年 | 1997  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/10587">http://hdl.handle.net/10097/10587</a> |

なが い やす お  
氏 名 永 井 康 雄  
授 与 学 位 博士 (工学)  
学 位 授 与 年 月 日 平成9年10月8日  
学位授与の根拠法規 学位規則第4条第2項  
最 終 学 歴 昭和63年3月  
東北大学大学院工学研究科建築学専攻前期課程 修了  
学 位 論 文 題 目 近世造営組織と建築技術書の変遷に関する研究  
論 文 審 査 委 員 主査 東北大学教授 飯淵 康一 東北大学教授 近江 隆  
東北大学教授 菅野 實

## 論 文 内 容 要 旨

### 序 論

我国の伝統的建築文化の成立過程を精確に理解するには、近世(江戸時代)に完成した建築造営組織と建築技術の内容を解明することが急務である。

これまで近世における建築生産組織に関する研究は、主に江戸幕府の造営組織を対象として行われてきた。しかし、幕藩体制と呼ばれるにも関わらず、幕府に対する諸藩の造営組織については殆ど研究されていないのが実状であり、近世生産史をより正しく理解するためには、これら組織の実態及び変遷過程を解明することが重要な課題である。

我国の伝統的建築物の設計において特に重要な指針とされた木割は、建築物の各部分や各部材相互の寸法の比例関係を示すものであり、これらを記したものが様々な建築技術書類である。ここに記される内容は当時の設計原理を解明する上で不可欠なものであり、従来の研究ではそれぞれの技術書の内容の解明に主眼が置かれてきた。しかしながら、それらは内容を歴史的変遷の観点から論じてきたとは必ずしも言い難い。

本研究は、従来個別に論じられる傾向があったこれら建築生産組織と建築技術について、両者の変遷過程の対応関係を検討することにより、組織の変化が建築技術書の内容に影響を及ぼしたことを明らかにしようとしたものであり、序論・第1部・第2部・総論から成り、各部はそれぞれ3章で構成されている。

### 第 1 部 近 世 造 営 組 織

江戸幕府及び東北地方において地理的に近接する諸藩の内、成立時の政治的・経済的背景が異なる譜代大名庄内藩と外様大名秋田藩並びに同米沢藩を対象とし、それぞれにおける造営組織の成立とその後の変遷過程を解明している。

#### 第1章 江戸幕府の造営組織

江戸幕府の主たる建築造営組織である御作事方の御大工頭・御被官・大棟梁・大工棟梁などの役職

に注目し、幕府の造営組織の確立過程を跡付けると共に、江戸時代中期における御作事方組織改革の意味を考察した。

開幕当初の造営組織は、徳川氏が三河・駿河における領主であった時代からの組織、即ち惣奉行（後年の御大工頭）・御被官・棟梁（後に御被官となる）を中心に構成される組織を母体とするものであった。慶長17年（1612）頃には御被官・棟梁は事務的な職務を遂行するようになり、これに替わって技術部門の担当者として後に大棟梁となる近江国出身の甲良氏、紀伊国出身の平内・鶴氏を登用した。その後、貞享2年（1685）に御小普請方が設置され、幕府の造営組織はほぼ完備した。これらは役職の世襲制に基づいた技術者の増強を主としたものであったが、享保期（1716-1736）にはこれら役職の世襲制廃止を断行した点でその本質において大きく異なる新体制の確立を目指す改革が行われた。

## 第2章 譜代大名の造営組織

庄内藩を取り上げ、造営に関わる御普請奉行を始めとする主な役職の成立過程と大工棟梁の出自や系譜を解明している。

御普請奉行職は寛永末から慶安頃（1640-50年代）に、その他の役職は延宝から元禄頃（1670-80年代）に確立され、造営に関する役所である大工屋も延宝期（1670年代）に完成した。大工棟梁職が確立されるのは寛文年中（1661-73）と考えられるが、この役職に就いたのは酒井氏が庄内に入部する以前に同地方を領有していた最上家の大工頭の技術系譜を引く小林家などの在地の有力大工であった。

## 第3章 外様大名の造営組織

秋田藩と米沢藩について、藩営作事における組織の変化や御大工頭等の就任状況の変化及び御大工などの構成員の変遷を明かにし、各藩における組織の成立と変遷の過程を解明している。

秋田藩では、延宝期頃（1673年以降）から職制の整備を行い、元禄9年（1696）には造営に関する役所である大木屋が確立した。それ以前の造営はその都度担当者が任命される一過性の組織であった。秋田藩の御大工は、佐竹氏の秋田遷封に伴い常陸より移ってきたものであり、これらが技術者の中枢を成していたが、享保期（1716-36）には御大工頭職の世襲制もなくなり、御大工は功績によって昇進することが可能となった。

米沢藩では、米沢移封当初に設けられた御作事屋頭を中心に造営組織が整備されていたが、この御作事屋頭の職制がほぼ確立したのは万治3年（1660）頃であった。米沢藩における工匠は、上杉氏の転封に伴い越後から集団で従って来た者達であり、御大工頭を始めとする主要な役職はそれらの家系によって幕末まで世襲された。

# 第2部 建築技術書

江戸時代初期、中期及び中期以降の各期における建築技術書を取り上げ、それぞれの時期における記述内容の特質を明らかにしている。

## 第1章 江戸時代初期の建築技術書 ―庄内藩大工棟梁小林家史料―

これまで殆ど存在が知られていなかった近世初頭以前の建築技術書について、新たに発見した庄内藩の大工棟梁小林家に伝えられた建築技術書の内、この時期のものを分析の主たる対象とした。

それらの建築技術書には多くの建築物に関する木割が収録されており、しかも同一形式の建築物に

対しても多様な木割が存在していた。それらの中には江戸時代中期以降に広く流布した木割書に記されるものとは異なる木割や用語が多々認められた。この様に少なくとも近世初頭には多様な木割が存在し、しかもこれらは或工匠家にほぼ同時期に存在しており、未だ後年のような建築流派意識は認められない。

## 第2章 江戸時代中期の建築技術書 ―江戸幕府大棟梁平内家史料―

江戸時代における最も代表的な木割書であり、今日でも木割研究の基本とされているものに幕府大棟梁平内家の家伝書「匠明」がある。「匠明」は「門記集」「社記集」「堂記集」「塔記集」「殿屋集」の五巻より成り、この中で最も早くから建築技術書としての体裁が整っていたのは「社記集」とされている。ここではこの「社記集」の各種古写本の比較検討を行い、「匠明」の成立過程を明らかにしている。

慶安4年(1651)の「社記集」写本には、建築流派(四天王寺流)を強調するような内容は記されていないが、元禄10年(1697)以降には漸次収録する建築物の種類を増補して建築技術書としての体系化を進めると同時に自家の業績と流派を強調するなどの改変を行い、享保年中(1716-36)には四天王寺流家伝書「匠明・社記集」の状態となった。

## 第3章 江戸時代中期以降の建築技術書 ―仙台藩大工棟梁朴澤家史料と秋田藩御大工頭戸崎家史料―

江戸時代中期以降及び幕末期の建築技術書として仙台藩の大工棟梁朴澤家と秋田藩の御大工頭戸崎家に伝えられたものを対象としている。これらについてそれぞれの伝来経緯と記述内容の検討を行い、またそれらの伝播の実態を明らかにしている。

朴澤家は宝暦年中(1751-64)に幕府大棟梁平内政治の門弟である深谷平左衛門より四天王寺流を相伝した。朴澤家の建築技術書は現存する平内家のものと同一の原典を基に当時公刊されていた木割書の内容をも収録しながら編纂されたものである。朴澤家は仙台において四天王寺流の一門を形成し、幕末時点では総勢59人もの門人を有していた。門人達によって筆写された四天王寺流の流れを組む朴澤家の建築技術書は広く仙台藩内に流布していった。

戸崎家は江戸時代末期に平内家や同じく大棟梁辻内家及び当時の著名な江戸の町大工であった大久保家など各方面から伝授された建築技術書を蔵していた。戸崎家の蔵書と平内家のものとを比較しても両者の内容に差異は認められない。また幕府大棟梁家の建築技術書であることを誇示しようとする様子も窺われず、流派意識も認められない。これらのことは既に幕末期には同種の建築技術書が至る所に流布していたことを示す。

## 総 論

第1部及び第2部での検討・考察を総合し、近世造営組織の変遷と建築技術書の内容の変化との関係について述べている。

造営組織は、(1)慶安期以前(17世紀前半)の未確立期、(2)慶安から元禄頃(17世紀後半)の確立期、(3)享保頃(18世紀前半)の改革期、(4)享保期以降(18世紀後半以降)の安定期の四期にわたり変遷した。

(1)の未確立期には、多くの大名が転封されており、それぞれの新領地で膨大な造営を行った。各造営はその都度編成される一過性の組織によって行われていたが、実質的にそれらの造営を担う工匠は

恒常的に確保されていた。その方法は、大別して三通り存在する。第一は旧領地からの工匠をそのまま新封地へ伴う、第二は新封地において現地採用する、第三はそれらの混合である。技術の伝播という観点からすれば、第一の方法が果たした意義は大きい。この時期の建築技術書には多くの種類の建築物に対し、多様な木割が記されており、しかもそれらの中には後世の木割書には見られない木割や用語が多々存在していた。

(2)の確立期は、前時期からある程度存在していた役職が恒常的な役職として編成されていく時期である。特に工匠に関係する役職は基本的に世襲されたため、当時の工匠は建築技術的には前時代のものを踏襲することで対応が可能であったと思われる。建築技術書の内容は前時代と比較して大きな進展はなく、四天王寺流或いは建仁寺流といった流派意識も未だ認められない。

(3)の改革期における組織は、役職の非世襲制に基づく点でそれ以前とは本質的に異なるものとなった。この造営組織の変化は建築技術書の内容に変化を促す一因となったと考えられ、特に幕府の大棟梁平内家によって建築技術書の体系化が進められて「匠明」が成立した。そしてこれは単なる建築技術書としての意義以外に建築流派(四天王寺流)の家伝書としての意義をも有するものとなった。

(4)の安定期にはいると、平内家によって確立された四天王寺流は諸藩の大工にも伝播していった。これに伴い大棟梁家の建築技術書は主流の建築技術を示すものとして諸国に流布していき、その結果中世以降少なくとも近世中頃まで存在していた多様な木割は消滅していった。

## 審査結果の要旨

我国の伝統的建築文化の成立過程を正しく理解するためには、近世(江戸期)に完成した建築造営組織と建築技術の内容を解明することが重要な課題となっている。本研究は、従来個別に論じられる傾向があったこれら建築造営組織と建築技術について、前者の変遷過程と後者の内容の変化との対応関係を検討することにより、組織の変化が建築技術書の内容に影響を及ぼしたことを明らかにしたもので、序論・第1部・第2部・総論から成り、各部はそれぞれ3章で構成されている。

序論では、本研究の意義、既往の研究及び論文の構成について述べている。

第1部では、江戸幕府と譜代及び外様の諸藩を対象とし、それぞれにおける造営組織の成立及びその後の江戸中期以降における変遷過程を解明している。

第1章では、江戸幕府の主たる建築造営組織である御作事方の確立過程を跡付けている。そして組織確立後の享保期(18世紀前半)には、御作事方における役職の世襲制が廃止されて組織改革が行われたことを明らかにし、この時期における組織変容の意味について興味ある考察を行っている。

第2章では、譜代大名である庄内藩を取り上げ、造営に関わる御普請奉行を始めとした主な役職が元禄頃まで(17世紀後半)に確立されていく過程を詳細に明らかにしている。

第3章では、外様大名である秋田藩と米沢藩を対象とし、前者では延宝頃(17世紀後半)に、後者では万治頃(17世紀後半)に造営組織が確立されたことを明らかにしている。また秋田藩については享保期に組織改革が行われ、役職の世襲制が廃止されたことを示すなど、諸藩の造営組織を解明する上での新しい知見を提供している。

第2部では、江戸時代各期における建築技術書を取り上げ、江戸前期と中期以降における記述内容の特質を明らかにしている。

第1章では、これまで殆ど存在が知られていなかった近世初頭以前の建築技術書について、新たに発見した多くの史料を緻密に解読し、これらには江戸中期以降の建築技術書には見られない多様な技法が記されていたことを明らかにしている。これは建築技術の変遷を解明する上での注目すべき成果である。

第2章では、江戸時代における最も代表的な建築技術書である幕府大棟梁平内家の家伝書「匠明」について、各種の古写本との比較検討を行い、「匠明」が江戸中期に代表的な建築流派となった四天王寺流の建築技術書として体系化されていく過程を明らかにした。

第3章では、江戸中期以降の建築技術書として仙台藩大工棟梁朴澤家と秋田藩御大工頭戸崎家に伝えられたものを対象とし、両者はともに平内家の技術を継承していることを明らかにすると同時に、平内家の技術がそれぞれの藩内に流布していく過程を解明した。これは江戸幕府の技術が諸藩に伝播していった過程について具体的に明らかにした初めての成果である。

総論では、第1部及び第2部で行った個々の検討・考察を総合し、造営組織の変遷と建築技術書の内容の変化との関係について述べている。造営組織は17世紀後半にかけて確立し、その後江戸中期に改革期をむかえたことを示した。そしてまた建築技術書の内容はこの期を境に大きな相違が認められたことを明らかにした。即ち、組織改革が行われる過程で平内家の四天王寺流を代表とする極く少数の流派が成立し、それらの技術が諸藩に伝播することにより、それ以前に存在した多様な建築技術が消滅したことを示している。

以上、要するに本論文は、近世造営組織の成立及び変遷の過程を具体的事例を取り上げて歴史的に解明し、これと建築技術書の内容の変化との対応関係を検討することによって、造営組織の変化が建築技術書の内容に影響を及ぼしたことを解明したものであり、建築生産史ならびに建築技術史の研究分野の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は博士(工学)の学位論文として合格と認める。